



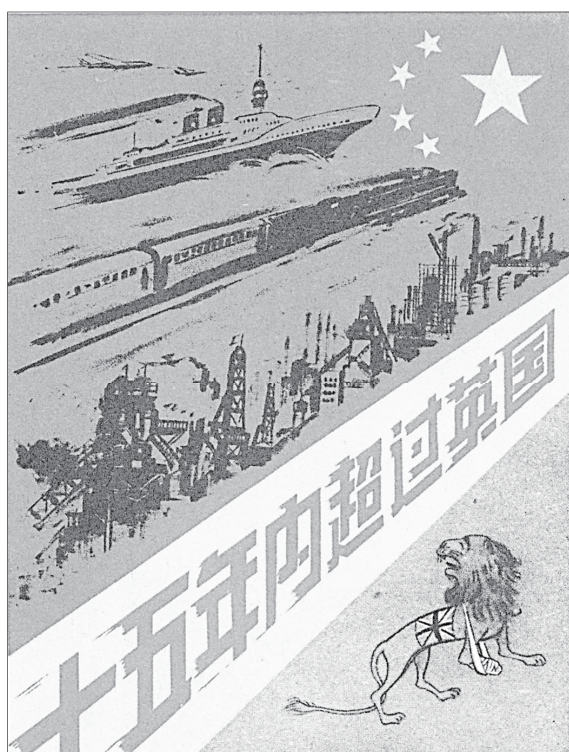
Title	トイレの革命一九五八
Author(s)	田村, 容子
Citation	連環画研究, 4, 30-53
Issue Date	2015-02-01
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98411
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98411
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_4_30-53.pdf



トイレの革命一九五八

田村 容子

1958年——「大躍進」運動の始まったこの年、中華人民共和国では、燃料問題が喫緊の課題となった。



「大躍進」とは、1958年から1960年にかけて中国共産党によって推し進められた、農業・工業の急激な増産政策である。

「十五年以内にイギリスを追いこす」という勇ましいスローガンが唱えられたが、実際には、経済の混乱と飢饉による大量の餓死者をもたらした。〔左-1-裏表紙、数字は参考文献を示す〕

このポスターでは、スピード感を伴い斜めに走り抜けるスローガン、画面の高いところで疾走する船舶と列車、そして工業の発展する中国を、片隅の傷つき痩せたライオンが、情けなく見上げている。ライオンはイングランドの象徴であり、胴に巻かれた国旗が示すように、中国に追いつ

こされたイギリスをあらわしているのだろう。水墨画風に描かれた「科学的」なものどもは、中国の伝統と近代の結合ともいうべき力強さを放っている。

それらが目指しているのは、中華人民共和国の国旗でおなじみの五つの星である。紅い大地に、ひときわ大きく輝く北極星のごとき中国共産党、そこに集まる人民の団結を象徴するといわれる「五星」。ここではその配置が、左から右に流れるスローガン

の文字の向きにあわせ、国旗を裏側から見たデザインになっているところがおもしろい。

この時期、新中国のプロパガンダ芸術たる連環画においては、増産に必要な燃料・肥料問題を解決することが、新たな画題となった。

その熱を帯びた様相は、たとえば次のような図像からもうかがえる。〔右-2-12 齣〕



これは 1956 年、毛沢東により提出された農業発展計画をわかりやすく図解した、『1956 年到 1967 年全国農業発展綱要（草案）』図解の一コマである。説明文では、リン酸肥料・カリ肥料の製造工業に勤しむほか、細菌肥料を発展させ、都市の糞便や生ゴミをできる限り利用せよと呼びかけられている。

この絵は、画面を半分以上埋め尽くす堆肥という、この時期でなければあり得なかった主題を描く。右奥の、子豚に授乳している雌豚と、柵から顔をのぞかせている豚たちに注目されたい。豚は中国人にとって、新石器時代から飼育してきた身近な動物であり、もっとも重要な食糧でもある。豚が多産であるさまは、「豊穰」のシンボルとして好ましいのみならず、ここでは「堆肥の増産」という新たな意味が付け加えられている。

1958 年とは、「大躍進」と「第二次五カ年計画」が始まり、糞便活用政策の呼びかけがピークに達する一年である。この年、農村から遠く離れた大都会上海の片隅でも、「ある革命」が進行していた……。

上海で起きた「ある革命」

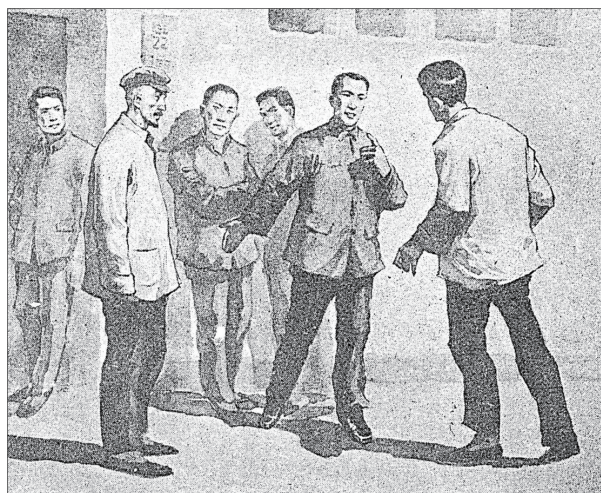
1950年代の上海。鴨緑江橋おうりょくこうきょうは、交通の要所である。毎日、朝から晩まで多くの車や人びとが、ここを通り過ぎる。橋の北に位置する提籃橋ていらんきょう区溧陽路りつやうろには、一軒の公衆トイレがあった。

1951年の夏、一人の少年がこのトイレの管理人となる。彼の名は、おうじょうこう王汝恒。このときまだ、16歳であった。〔右-4-3齣〕

「よう、大便所所長！」——ときには、こんな心ない言葉を彼に浴びせ、嗤う者もいる。おもしろくない。王汝恒は内心、そう思っていた。ある日、目覚まし時計が壊れ、起きるとすでに日が昇っていた。王汝恒が職場に駆けつけると、そこにはもう、彼を待つ大人たちが長蛇の列を成している。

「きみ、社会に不可欠な仕事を重視したまえ！」——その言葉で、王汝恒は目が覚めた。〔左-4-7齣〕

この絵には、1950年代の中国の公衆トイレの様子が、繊細な筆致で活写されている。



王汝恒の背後に描かれる「個室」は、壁でしきられてはいるが、扉はない。便壺は一本の溝状を成しており、溝の奥深くに排泄物が堆積する仕組みである。この公衆トイレは、夜間は施錠されるようだ。それゆえ早朝の出勤時間、王汝恒が鍵を開けるのを待ちきれない大人たちは列を成す。1980年代にいたるまで、中国では都市部といえども、住宅にトイレが備えつけられてい

ないことが普通であった。人びとは公衆トイレや職場のトイレ、また「おまる」を利用して用を足していたのであり、ここに描かれる大人たちの表情や腕組み、足もとからうかがえる苛立ちは、彼らにとって公衆トイレの解錠が死活問題であったことを物語っている。

王汝恒は、着任時、清掃管理局の党支部書記にかけられた言葉を思い出していた。

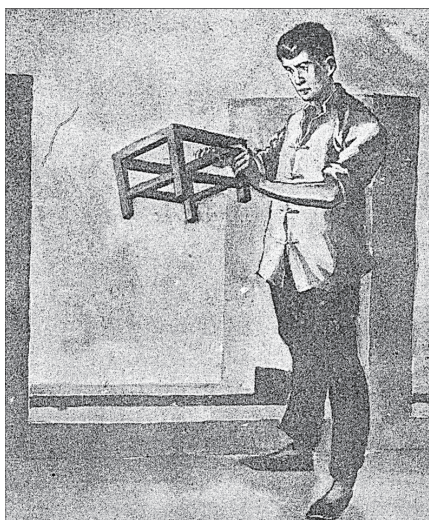


「人民の必要とする仕事は、やりがいのある仕事なのだよ」。

夜、彼は日記に向かい、次のようにしたためた。

「人民がぼくを必要としている、社会がぼくを必要としているのだ……」。

その日から、王汝恒は、人びとがまだ眠りにについている時刻に職場に向かった。トイレを掃除し、終われば道路を掃除する。老人が来れば支え、盲人が来れば便壺に導く。子供が便壺に落ちないように、特製の椅子を用意した。蚊や蝇がいれば、一匹たりとも見逃さない。〔下-4-14・15齣〕



深夜、独りになると、彼は自分のために計算してみた。毎日、訪れる5千人あまりの人びとのために働いている。ひと月で15万人。4年で720万人。これは、ほぼすべての上海市民に奉仕することに等しい。〔左-4-17齣〕



ある朝、大便を終えた人が慌てて戻ってきて言った。

「財布を見なかったかい？」

王汝恒は一緒に探したが、見つからない。

そのとき、ある考えが彼の脳裏にひらめいた。王汝恒は少しもためらうことなく、すぐさま腕を深い溝の

奥へと差し入れる。〔右-4-20
齣〕

彼は手が糞便にまみれるのもいとわず、中をかき回すと、はたして財布は見つかった。きれいに洗った財布を返すと、持ち主は2元を彼に差し出したが、王汝恒は固辞して言った。

「これは、ぼくの務めです」。

またある晩、便壺が突然詰まった。外の貯留槽を開けて調べねばならない。王汝恒は、長年開けられることのなかった貯留槽の蓋をこじ開ける。すると、異臭が鼻をついた。穴の中は暗い。マッチを擦ったその瞬間——「ドン」という音とともに穴から火が噴き出し、彼は手の甲と肩を火傷した。〔左-4-28齣〕



どうして穴から火が噴き出したのか？ 王汝恒は、糞便やゴミの中には「沼気」^{メタンガス}というものがあり、この気体は燃えることを教わった。嬉しかった。糞便は、燃料になり、灯りをともし、発電することもできる。平凡な労働の中に、探求すべき学問があった！

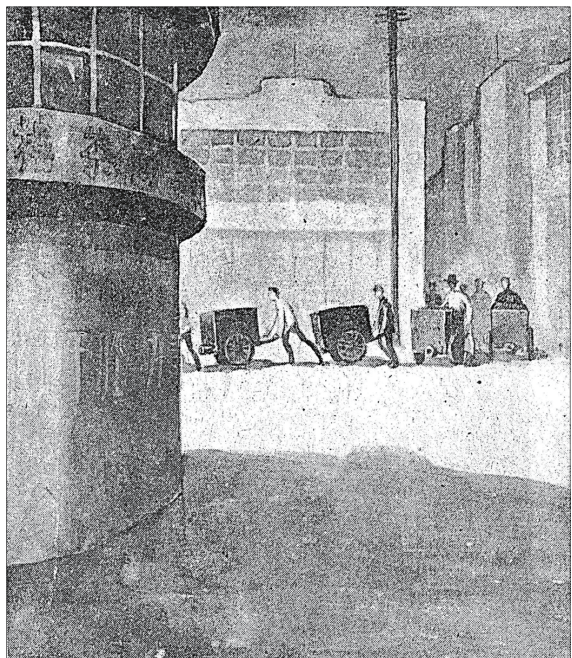
この日から、王汝恒は、夜十時を過ぎるとトイレで

勉強するようになった。彼がこれほどトイレの仕事を愛するのは、新社会に感謝しているためだ。王汝恒は七歳のとき、父を亡くしていた。働きすぎた父は病に倒れるが、治療費が払えなかった。死にゆく父の姿を、ただ見ているほかなかった彼は、解放前の旧社会を憎んでいた。

1958年3月、王汝恒は「糞車(肥車)^{こえぐるま}」の仕事に配属された。住民のおまるから糞便を回収するこの仕事を、彼は喜んで引き受けた。提籃橋区の同志たちとともに、多くの肥^{こえ}を集め、全力で農業の増産を支援した。〔右-4-38齣〕

1958年5月、共青团上海市委员会は、王汝恒を同年の「上海市青年生産突撃手」とし、彼は「全国青年工人代表大会」に出席した。

彼は、毎日糞便とつきあっている。しかし、その心はいかなるものよりも清いのだ。



——この物語は、『厕所管理員王汝恒（トイレの管理人王汝恒）』（1958年12月）という連環画につづられるものである。〔左-4-表紙〕

前書きの「出版者の話」によれば、この作品は「青年工人の物語の八」であり、上海で開催された「全国青年工人代表大会」には、新疆ウイグル自治区のカラマイ、東北地方の大興安嶺^{だいこうあんれい}など、全国各地から選ばれた青年労働者が出席した。そのうち二十名の事績を取り上げ、連環画のシリーズが編まれたという。なお、ここで述べられる「全国青年工人代表大会」とは、おそらく1958年4月5日から12日にかけて上海で開催された、「全国青年工人代表会議」のことを指していると考えられる。



中国のトイレ事情については、『連環画研究』第3号の武田雅哉「〈小人書林迷走録〉第5回 〈上吐下瀉〉——あるいは痰壺と馬桶のある風景——衛生知識宣伝連環画に迷いたい!」で触れられている通り、李家正文^{りのいえまさふみ}の『厠考』、『厠史話』、『厠風土記』など一連の研究、『アジア厠考』所収の北野尚宏「中国——一九八〇年代初頭の都市屎尿の農村還元」および木崎翠「中国——都市部の手洗い問題」、また武田雅哉『中国乙類図像漫遊記』に詳しく述べられている。それらによれば、中国の糞便利用の歴史は古く、図像は漢代の画像石にまで遡ることができる。しかし、ここで注目したいのは、1958年前後に、農業増産のための糞便の回収、また糞便からの「沼気」の抽出という現象が、突如脚光を浴びている点である。

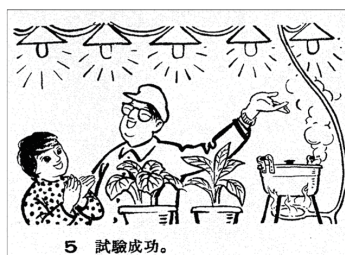
1958年2月の『連環画報』には、しばしばこの主題を手がける連環画絵師^{ゆういんしょう}游允常による、「糞便賽黄金（糞便は黄金に勝る）」という作品が掲載される。説明文では、湖北で糞便を発酵させた後の気体を燃料として利用する実験が成功し、この気体は点灯、炊事、内燃機関の燃料として用いることができると紹介されている。〔下-12-3～5齣〕



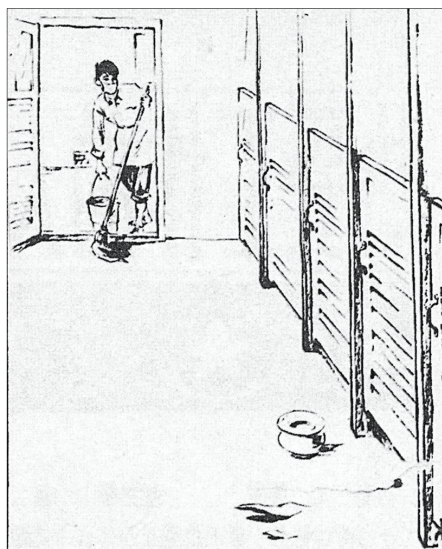
3 採用新法。



4 依法炮制。



5 試験成功。



また、『厠所管理員王汝恒』と同工異曲の作品に、『連環画報』1958年10月の「熱愛工作的人（仕事を熱愛する人）」がある。これは、立派な技術者になることを夢見て麻紡績工場に勤めた少年李文和^{りぶんか}が、トイレの清掃係に配属され、やる気をなくす。しかし、党支部書記に励まされ、トイレ掃除に勤しみ、ついには「社会主義建設積極分子」に選ばれるという物語である。〔左-13-8齣〕

こちらのトイレは、職場併設のものだけあって、壁と扉でしきられた完全「個室」仕様である。ただし、扉は下半分のみであり、誰が使用

中であるかは一目瞭然、秘密裏に事を済ませるのは難しい。中央に置かれているのは痰壺である。

李文和は、ちり紙を節約するため、あらかじめ四つに切ったものをお手製の箱に入れておくなど、涙ぐましい努力を行っている。その甲斐あってか、このトイレは、職場の同志たちから「われわれのトイレは、入り口にそう書かれてなければ、大小便をするところだとは信じられないよ！」と絶賛されるほどになった。

糞便と向き合い、成長する少年のビルドゥングスロマン。それは、最下層の労働者が人民の模範に転じる立身出世の物語であり、「革命」そのものを象徴する寓話でもある。そして、『厕所管理員王汝恒』のように、1958年に急増する糞便を扱った連環画世界からは、糞便と真剣に向き合うことによってのみ得られる、崇高さのようなものすら漂ってくるのである。

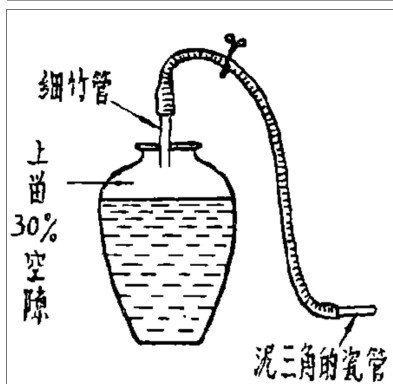
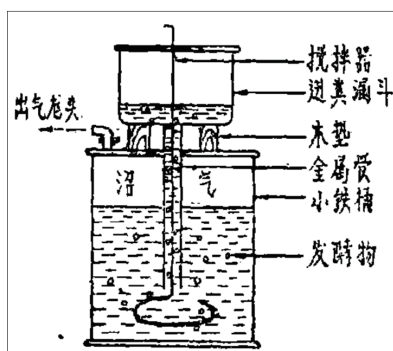
科学的糞便活用術

1952年、上海市化学化工学会の発行する『化学世界』という雑誌に、「甲烷的用途—蘇聯利用废物製取沼氣的成就（メタンの用途——ソ連の废物利用による沼気生成の成就）」と題された論文が発表される。そこには、ソ連では废物を利用したメタンガスの製造がすでに実現していること、そして废物を濾過したものを細菌で消化し、発酵させることによってメタンガスを含む気体を発生させる方法、この気体をエンジンに送り、圧縮すれば大型自動車を動かすことも可能であることなどが紹介されている。

「ソ連政府は船艦を废物回収のために用いており、その船艦自体も沼気を利用して海洋上を運行する。さらには多くの自動車もまた、ゴミや废物の収集に用いられ、同様に沼気で動いている。それらが毎日収集するゴミや废物は、かなりの量に達する。現在、人びとがメタンを用いて炊事、加熱、点灯、冷凍、自動車運輸などを行うのは、すでに普遍的なこととなっている」。

糞便が、エネルギー源になる。錬金術のごときこの科学知識は、中国全土の科学愛好家の好奇心を刺激した。1958年になると、『化学通報』をはじめとする科学啓蒙雑誌に、陸続と糞便からメタンガスを採取する方法が掲載される。ガスジェネレーターを用いた糞便発酵池の方法について投稿した鄧明（江西万年中学）は、次のように述べている。

「全国各地、とりわけ農村でまさしく炎が天をつく勢いで、糞便を灯火や水のくみ上げ、発電に用いようと躍起になっているとき、化学に従事する一人の労働者として、こうした新鮮な事柄に直面し、興味を抱かずにはいられない」。



1958年の『化学通報』には、「利用糞便発酵製取沼気（甲烷）の実験（糞便発酵を利用した沼気（メタン）生成の実験）」、「簡易的沼気発生缸（簡易沼気発生瓶）」などと題された、多くは学校教員による投稿が、装置の図像とともに相次いで掲載される。〔左-16・17〕

1958年7月には広東で、また11月には安徽で「全国沼気現場会議」が召集され、その報告書によれば、『厕所管理員王汝恒』の舞台である上海では、同年11月に70パーセントの点灯と50パーセントの炊事にメタンガスを用いることが計画されている。

湖北、広東がいち早く実験に成功した、糞便を利用した「沼気発酵池」や「沼気発電所」は、新疆哈密県、瀋陽など中国各地に作られ、こうした全国的な糞便利用ブームは、むろん連環画世界にも反映されていくのであった。

糞便をあつめよう

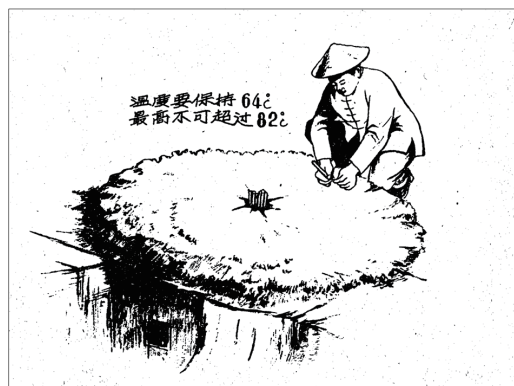
1956年11月、『連環画報』に、第八次全国代表大会における「第二次五カ年計画」の建議を図解説明したものが掲載される。〔右-21-23齣〕

農業増産のための肥料源の開拓も目標に掲げられ、ここに見られる「積肥（堆肥づくり）」の図は、以後繰り返し連環画に登場することとなる。

『火温渥糞経験紹介（加熱式肥だめ経験の紹介）』（1959年3月）は、当時最先端の科学知識を結集して作られた肥だめを、わかりやすく図解する連環画である。

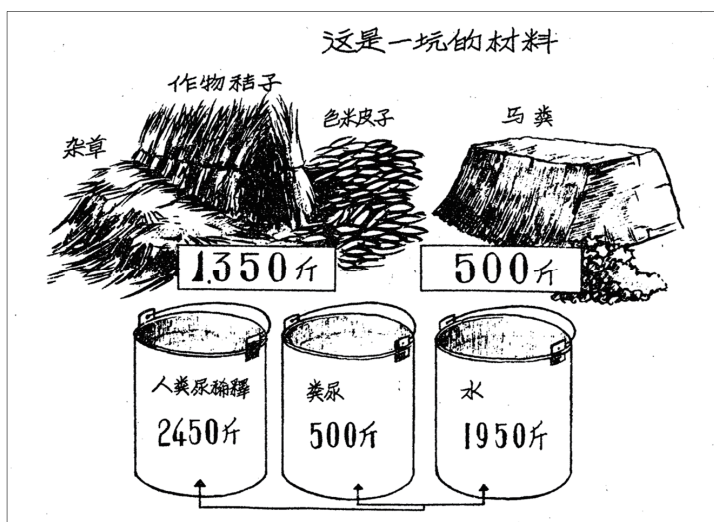


表紙には「積肥」を行っている人物が描かれ、遼寧省綏中県の火力を用いて糞便の発酵を促す肥だめの技術が、その構造、寸法、糞便の配合、火加減、適温など、微に入り細をうがち説明されている。〔下-22-表紙・12齣〕

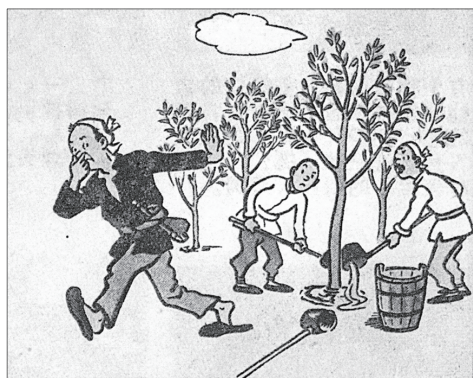


科学的な説明文に附される絵画もまた、即物的な筆触であらわされ、たとえば下の図中、右上にある馬糞に注目されたい。〔右下-22-7齣〕

「糞便」という新たな画題をいかに描き、どの程度写実的に表現すればよいかというのは、すべてを図像化しなければならない連環画絵師の直面する問題である。7頁の「糞便賽黄金」に見たように、それらは往々にして湯気もしくは臭気に焦点があてられ、縦の波線を放つ物体として描写される。



一方、『火温沤粪经验介绍』は、農作業の実用書であるため、馬糞もまた実験材料の一種として、人びとの五感をなんら刺激するものではないかのように描かれている。



しかし、これらの肥料を扱う作業がなかなか辛いものであったことは、たとえば怠け者を描く「夢」(『連環画報』1956年12月)という連環画作品に、端的に示される。〔左上-23-5齣〕

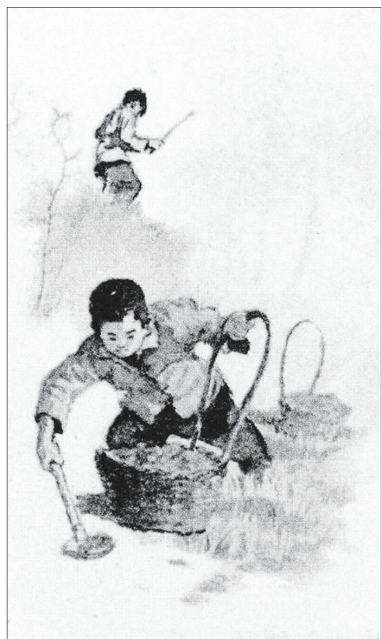
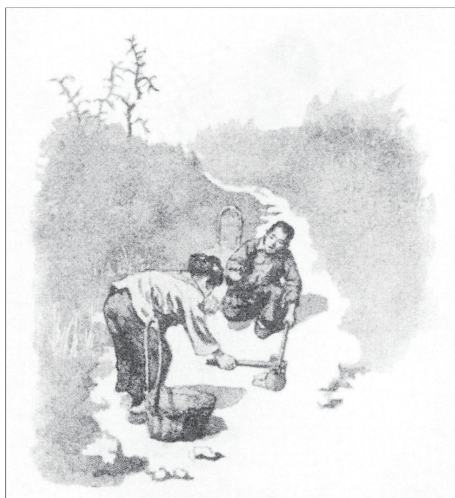
こうした「いけない大人」が恐れる糞便の臭気を、ものとしめないのが「よいこ」である。『連環画報』1957年2月の「小突撃隊員(小さな突撃隊員)」は、糞便拾いを通して友情を

育む二人の少年の物語である。この時期、中国の農村では、青年による「積肥突撃隊」なるものが組織されていた。

万家六^{ばん か りく}の兄さんは、突撃隊長である。万家六は自分も入れてほしかったが、「十二歳じゃだめだ」と言われてしまう。そこで、同級生の劉賓^{りゅうひん}と相談し、犬の糞を10キロ拾い集め、みんなに見せびらかすことにした。劉賓は万家六を「たからもの」のありかに連れていってくれるが、どちらが先にそれを見つけたか

で喧嘩になってしまう。

〔右-24-7齣〕



喧嘩別れをした後、野犬に襲われた劉賓を救うため、万家六は勇気を振り絞って野犬と対決する。その際に劉賓は、万家六の分も糞を拾ってやり、こうして二人は10キロ以上の犬の糞を集め、あこがれの「積肥突撃隊」に入隊を許されたのであった。〔左下-24-17齣〕

ここでは、ぼかしを多用した図像の持つ抒情性も相まって、糞便もまた、よいこの「たからもの」たるにふさわしい、柔らかなおまんじゅうのように描かれている。犬の糞を拾うために用いられる道具は、

「糞鏟子^{ふんさんし}」と呼ばれるスコップ状のものである。娯楽の少ない時代、スコップで犬の糞を拾い集めることは、子供にはゆかいな遊びであったのかもしれない。

「送糞」の図像学

李家正文の研究によれば、中国の「糞車」は、古来一輪車であるという。新中国においてもその伝統は引き継がれていたようで、連環画に描かれる糞便を運搬する車は、一輪車であることが多い（2頁・6頁・9頁右図参照）。ここでは、畑に肥料を運ぶ「送糞」を描いた図像を確認したい。



7 送糞大隊日夜不停，他們的苦战口号是：『風当广播，雨当茶喝，月当电灯，露当被窝。』

1958年12月の連環画「翻不完土地不回家（土地をすき起こすまで帰らない）」は、河南の人民公社に所属する秦宝善^{しんほうぜん}なる人物の作である。説明文には、「送糞大隊は日夜休まず、彼らの苦闘のスローガンとは、『風を放送とし、雨を茶とし、月を電灯とし、露を布団とする』である」と書かれている。〔左-26-7齣〕

1960年1月の「慶豊年 頌公社（豊年を慶び、公社を頌える）」は、同時期の農村を詩情あふれる神話的なものとして描く連環画である。ここでは、「送糞」は少女の操縦する天翔る「糞車」によって、雲

の彼方で行われる。〔右-27-齣数不詳〕

「東方が紅くなりゃ月は引っ込み、車輪が回りゃ地も揺れる。鞭をふりふり霧をかきわけ、糞肥^{しもごえ}の車は歌につれ」。

図中に挿入された文句は、陝西地方の民謡をもとに作られた『東方紅』の歌詞に似ている。

「東方紅、太陽昇、中国出



東方紅・月儿落・車輪滚动地哆嗦。
长鞭甩碎空中霧・一車糞肥一車歌。

了個毛沢東。他為人民謀幸福、他是人民大救星（東方が紅くなれば太陽が昇り、中国に毛沢東があらわれた。かの人は人民に幸福をはかり、かの人こそ人民の救世主）。

試しに歌ってみると、毛沢東を頌える歌と「送糞」の歌は、替え歌のごとく同じメロディーで歌うことが可能である。

愛と糞を運んで

さて、「送糞」の車が運ぶのは、糞便だけではない。

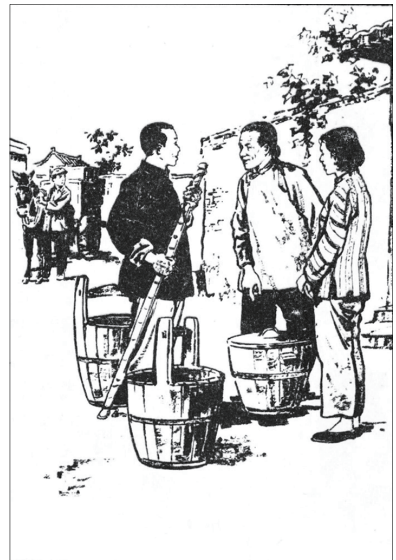
浩然^{こうぜん}原作の連環画『拉糞（糞運び）』（1958年10月）は、農村に「下放」^{かほう}された青年が、まちに糞便回収に行く苦悩を描く物語である。

「下放」とは、社会主義的思想改造のため、都会の知識人などを農村に送り労働に従事させることを指す。主人公秋成^{しゅうせい}はもと市の文化科幹部であり、まちで糞便を集めているところを、妻やその母親の黄大媽^{ばあさん}に見られることを恐れていた。折悪しく、秋成を乗せた「糞車」は黄大媽の家の前で停まる。秋成は門をくぐるができない。だが、郷支部書記が訪ねると、黄大媽は自主的に集めた糞便の桶を差し出してこう言った。
〔右-28-14齣〕

「これは長屋の仲間で買った桶ですよ、糞便が中に入ってますから、あなたがたが来て車にあけてくれれば、手間も省けるし衛生的ですよ！」

帰り道、郷支部書記は秋成に告げた。黄大媽はかつて、「糞車」が来ると窓や門を閉め切り、臭いがうつるのをいやがっていた。しかし今や、彼女の思想の「大躍進」は、われわれの駆る馬車よりも速い、と。

『連環画報』1958年3月の「挑糞（糞担ぎ）」は、少数民族である傣族^{タイ}の農村風景を描く。傣族が作物を作るとき、もともと肥やしをやる習慣がなく、若者たちは糞担ぎを恥ずべき行為と見なしていた。水稻の増産のため肥料を施すことになり、傣族の青年龍罕^{りゅうかん}は、自分が先頭に立つて行うことを決意する。しかし、彼には意中の娘伊娘^{いじょう}がいた。





龍罕は彼女に見られることを恐れるあまり、妹に伊娘をまちに連れ出すよう依頼する。翌日、伊娘が出かけた隙に、若者たちを叱咤激励して糞担ぎをする龍罕。だが、「伊娘が来たぞ！」の声に、彼は思わず樹の陰に隠れてしまう。どうやらだれかの冗談らしい。みな笑い合っていたそのとき、本当に伊娘が姿を現した。〔左上-29-10齣〕

「あなたが口ばっかりの人だなんて思わなかった！」伊娘は肥桶を奪い取るや、自ら担ぎ上げた。彼女は、まちに行くふりをしていたのだ。龍罕はどうしてよいかわからず、ぼんやり立ち尽くすのみ。〔左下-29-11齣〕

やがて、心を入れ替えた彼は、新たな肥桶を担ぐと、彼女の後を追うのだった……。

この連環画が掲載された号は3月6日発行であり、中国では国際婦人デー（3月8日）を祝うことから、同号は女性もの連環画特集号となっている。そうした背景も考慮に

入れて読み解くなら、左下の図像は、「男なみに」、颯爽と「糞便を担ぐ」、「少数民族」の「労働する女性」を描いており、1958年に唱えられたさまざまなスローガンが、幾重にも織り込まれた一幅であるといえるだろう。

糞便がとりもつのは、男女間の愛情に限らない。

撫順中学学生 周 玉 満しゅうぎよくまんの手になる「人人称讃王大伯おじさん」（みんなが称える王大伯）（『連環画報』1958年11月）は、夜明け前に「送糞」しようと畑に一番乗りした「ぼく」が、糞の山が跡形もなく消えていることに気づくところから始まる。もしや悪漢に盗まれたのではないかと考えた「ぼく」は、その夜畑を巡視した。はたして現れた人影に近づくと、人民公社の王大伯であった！〔右-30-6齣〕



夜のうちにこっそり「送糞」していた王大伯。どうして人より余分に働いたのに、労働点数を記録しないのだろう？ 王大伯は言った。「わしのような身よりのない年寄りが、社を愛さずにだれを愛す？ 労働点数を稼いでどうするね？」

王大伯が夜中に「送糞」していたことは、瞬く間に村じゅうに知れわたり、みなこの70すぎの老人の人徳をほめ称えたのだった。

かように、1958年の連環画世界では、人びとは糞便とともに、いわく言いがたい形而上的ななにかをも運んでいたようである。

養豚と糞便の臭い仲

「大躍進」時期には、人糞と並んで家畜の糞便の活用も呼びかけられ、その源となる豚の飼育も奨励された。それゆえ、「養豚」は1950年代の連環画の一大画題を成している。養豚連環画を得意とする農民絵師郭同江^{かくどうこう}の作品など、名作も数多いが、それらについては稿を改めて述べねばなるまい。ここでは、糞便を描く養豚連環画を見ていくことにしたい。

『連環画報』1959年3月の「毛主席関心我們（毛主席はわれわれを思いやってくださいる）」は、湖北省人民銀行の呉伊凡^{ごいはん}の作である。舞台は四川、物語は養豚場長を務める「わたし」の視点から語られる。

「毛主席がいらっしゃいました！」春蘭^{しゅんらん}と秀芳^{しゅうほう}、村の娘たちの声に駆け出すと、二人はアハハと大笑い。わたしはからかわれたことに気づきました。そのとき突然、朗々たるよその土地の訛りが聞こえてきました。「同志たちよ、ごくろうだね！」なんと、毛主席が本当にいらっしゃったのです。わたしは感激のあまり、「毛主席万歳」と叫びたかったのに、声も出せずぼんやりと笑うことしかできません。

毛主席は養豚場で鍋に煮える牛糞をご覧になると、「これは牛糞かね？」とお尋ねになりました。
〔右-31-9齣〕

春蘭が「糖化させた牛糞です、豚の大好物なんです」と答えると、毛主席はたいそう興味深そうに、自らひしゃくですくって豚にお与えになった





のです。豚が争って大喜びで食べると、あのお方もいっそう嬉しそうにされました。〔左-31-10齣〕

「^{こん}園」という漢字が示す通り、中国では古来より、豚小屋とトイレは同義であった。もっとも、連環画に描かれる人民公社の豚たちは、「お豚さま」として大事にし、糞便よりも栄養のあるものを与えることが奨励されていたようである。

「猪媽媽積肥」(『連環画報』1959年12月)は、^{ブタかあさん}「猪媽媽」自らが語り手となり、彼女の幸せな人生、ならぬ豚生について教えてくれる。「わたしの主な任務は『積肥』、わたしは一年で5000キロもの^{きゅうひ}厩肥を堆積しますの」。

食べ物については、トウモロコシの芯、米ぬか、南方から移植した^{ボタンウキサ}水浮蓮などのほか、人民公社が豆腐製造を始めてからは、おから、大豆かすなど

も好んでいるそうである。猪媽媽は人民公社で幸せな結婚、妊娠生活を送り、生まれた子豚も毎月予防接種を受けている。「わたしたちの生産する肥料はもっと増えますのよ。来年には、公社は1畝(6.6アール)あたり一頭の豚を計画しています。そうなれば、もみは畝あたり500キロ、小麦は300キロの収穫を超えますわ」。〔下-32-3・11齣〕



連環画世界では、養豚と糞便、そして農村の女性は相性がよい。

先に示した「毛主席関心我們」では、豚に糞便、毛主席に労働する農村女性が一コマにおさめられ、「大躍進」時期として非常におめでたい図柄を成している。こうした

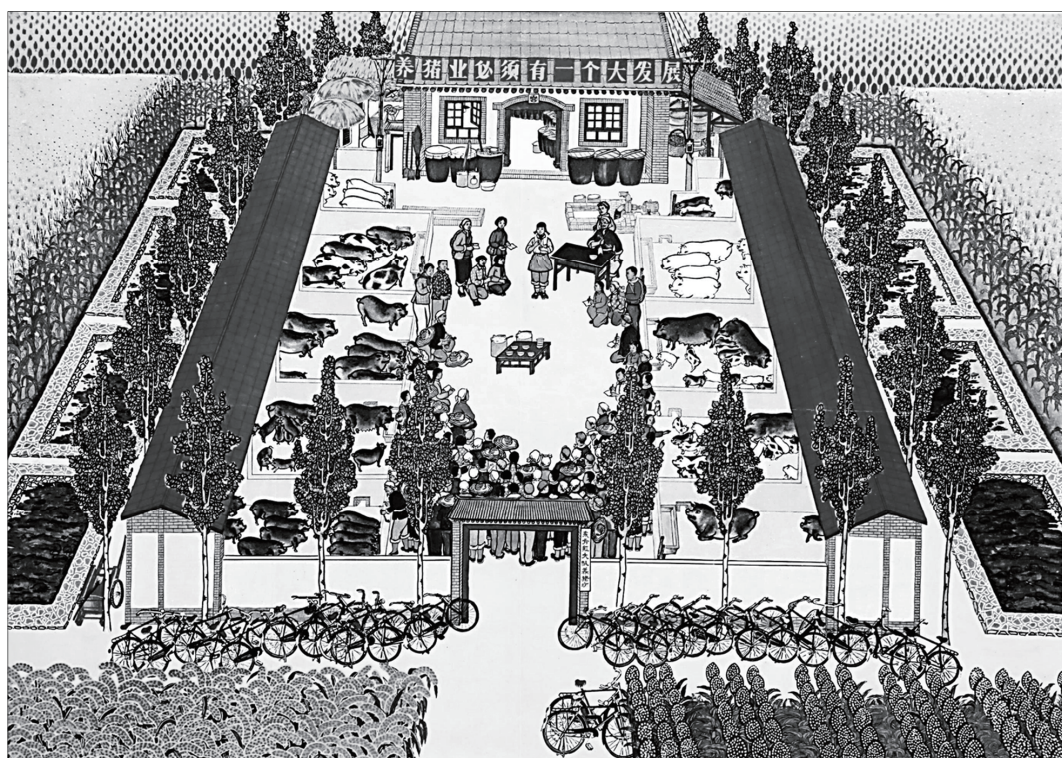


画題は連環画のみならず、プロパガンダポスターにも好んで描かれた。

以下のポスターは、1970年代のものである。左のポスターには、「豚が多いと肥料も多く食糧も多い」とのスローガンが見える。〔左-43〕

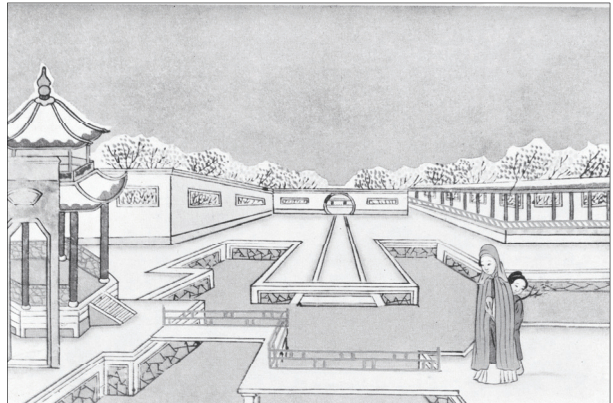
また、下のように、豚・糞便から作られた肥料・農村女性・「糞車」などが線対称に配された

ポスターは、さながら楽園を描く一幅の吉祥画のようである。〔下-44〕



これは農民の手による「農民画」だが、俯瞰の視点で奥行きのある画面、授乳する雌豚や動きまわる子豚といった細部にわたる描写は、実際には肉眼で見ることのできない、視覚のスペクタクルを味わわせてくれる。

こうした構図は、「西洋景」、「西湖景」などとよばれた「のぞきからくり」の箱に入っているネタ絵によく似ている。拡大鏡を用いて絵を眺める「西洋景」は、遅くとも清代には中国にあったといわれる。それらを収録した阿英編『紅樓夢版画集』の「琉璃世界白雪紅梅（別名：宝琴探梅）」（清代中期）と見比べてみよう。
〔右-33〕



増産が急務であった時代、労働力としての女性の活用、肥料源としての雌豚の多産は、ともにプロパガンダすべき画題として重宝されたようだ。「毛主席関心我們」の「毛主席」が示す通り、糞便や養豚といった「汚穢的」なものと触れあうことは、「革命精神」の称揚とも結びついている。そのメッセージはまぎれもなく「文明人」男性の立場から発信されているにもかかわらず、連環画では農村女性の語りが擬態される。「毛主席関心我們」や「猪媽媽積肥」に見られる理想化された「女性」の語りは、はからずも、中国共産党の政策における労働する女性と養豚の扱いの近似性を示しているのではないだろうか。

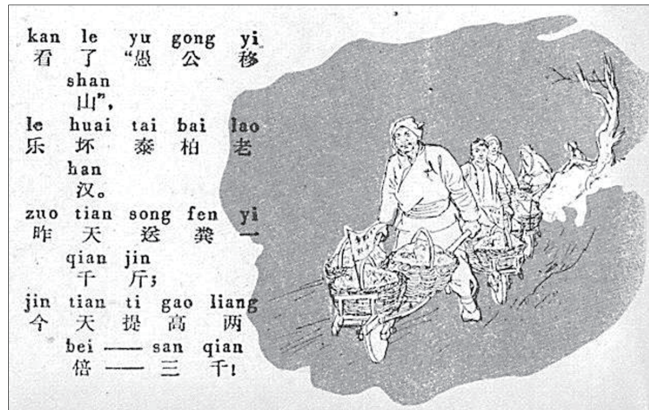
糞便から文字を学ぶ

1960年になると、「送糞」の図像は、「掃盲識字運動」にも登場するようになる。「掃盲識字運動」とは、「大躍進」時期に大々的に展開された識字教育である。1958年2月には、「漢語拼音方案」^{ピンイン}が公布された。これより、「拼音」すなわちローマ字による表音方式が推し進められ、漢字の簡略化や「普通話」と呼ばれる共通語の普及とあわせて、農村における識字率の向上が目指されたのである。

『連環画報』1960年4月の「人人説的普通話 处处聽到讀書声（人びとの話す共通語あちこちで聞こえる読書の声）」は、山西にある万栄県青谷村の識字運動を、図像で紹介したものである。前書きによれば、かつては農民が字を読めなかったので、人民公社でガスエンジンを買ったり化学肥料工場を作ったりしても、使いこなせなかった。

しかし、1958年9月より「拼音」を用いて識字教育を試みたところ、わずか二ヶ月で村民の識字率は向上、工場は稼働し、試験田の生産量は上がり、子豚は丸々と太ったという。

「愚公^{ぐこう}山を移す^{たい}」を学ぶ、泰柏^{はいくわいさん}老漢大いに喜ぶ。昨日は千斤糞を運ぶ、今日は三千、三倍に及ぶ。〔右-38-韻数不詳〕

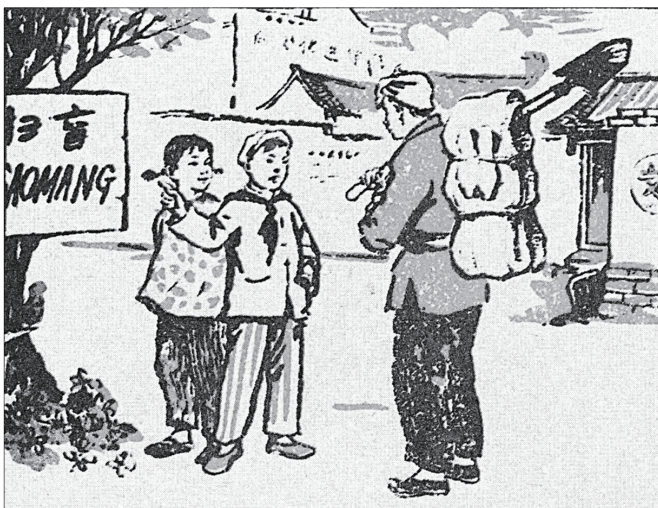


説明文は、音読しやすいように韻をふんでおり、漢字にはすべて振り仮名として「拼音」がつけられている。

「愚公山を移す」とは、『列子』に見える寓話であり、立ちのぼる山を動かさんと子々孫々にわたりもくろみ、天帝を感じしめた不屈の老人の話である。ここでは、一輪車で糞便を運ぶ老人の姿が、「愚公」になぞらえられている。

同号の『連環画報』に掲載された「悶塊^{どいかんぎゅう} 開竅（愚か者 悟る）」は、文盲だった農民青年程寛牛の奮闘を描く物語である。

1951年、彼は夜学に通い字を学び始めるが、長続きせずに終わってしまう。1958年、人民公社が成立すると、村に「漢語拼音識字班」ができた。程寛牛は文字を学ぶより製鉄のほうが肝心とばかりに、山に行き「土法炉^{どほうろ}」で製鉄に励む。しかし、字が読めないで蒸気エンジンの使用法がわからず、技術が学べない。

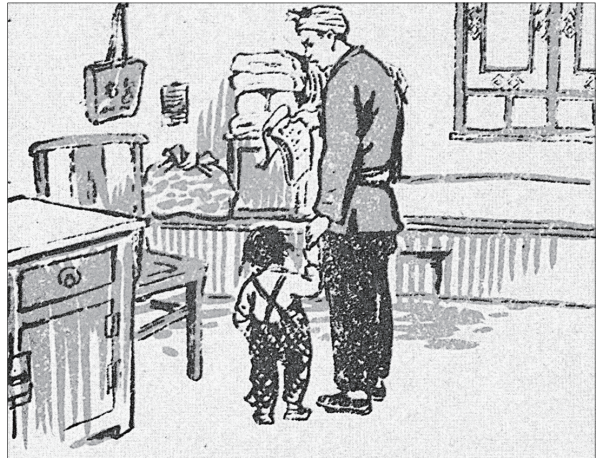


数ヶ月後、村へ戻ると、壁に見慣れぬスローガンや「拼音」が書かれている。赤いネッカチーフのよいこたちに、「これが読めたら通してあげると、「掃盲^{SAO MANG}（文盲を一掃する）」の看板を指さされる程寛牛。彼には一文字もわからず、赤くなるばかり。〔左-39-9韻〕

家に帰ると、畑に出た嫁さんが残していった帳面に、筆づかいも見事な美しい文字が！

「それ、母ちゃんのだよ」と娘に言われ、動揺を隠しきれない程寛牛であった。〔右上-39-12齣〕

発奮した彼は、「送糞」するときに「糞車」に文字板を、土を掘るときには腕に文字板を取りつけ、野良仕事をしながらそれらを唱えた。

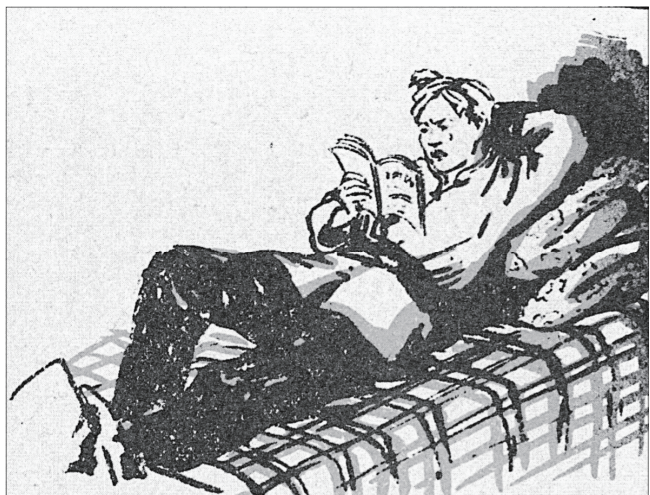


「糞車」に取りつけられた文字板には、「积肥 ji fei」、すなわち「積肥」の二つの漢字が簡略化された「簡体字」と、その読みを示す「拼音」を確認することができる。〔左-38-15齣〕

刻苦勉励の甲斐あって、ついに程寛牛は文字を覚え、『劉介梅忘本回頭（劉介梅、昔を忘れ改心する）』を読んで涙するほどになる。〔右下-39-20齣〕

「劉介梅」とは、実在した湖北の農民である。貧農出身であったが、解放後に土地改革によって農地を得ると、農業の集団化に反対したため、「翻身忘本（解放されて昔を忘れる）」の典型として批判された。

書物によって新たな知識を吸収した程寛牛は、殺菌剤を使用するなどの新型農法により、試験田の栽培に成功する。ある日、

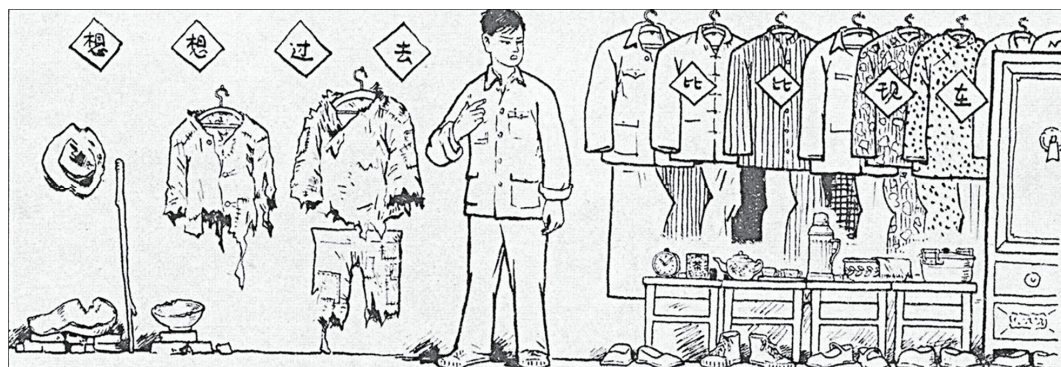


果樹園を歩いていた彼の口からは、思わず知らずこんな詩句がこぼれ出るのであった。

「冬去春来百花香、如今窮人變了様、果樹開花滿園鮮、農民生活樂無疆（冬去り春来て百花は香り、いま^{きゆう}窮^{さま}す人も様変わり。果樹の花開き園じゅう鮮やか、農民生活楽しみ尽きぬ）」。

ここにもまた、糞便が識字と結びつくことによる「革命」の輝かしい成就を見ることが出来る。程寛牛に文字を学ぶ決心をさせるのは、村のよいこと自身の妻、そして娘である。オンナ・コドモ、すなわち伝統的な中国の価値観では「小人」と見なされてきた者どもに先をこされた彼の悲哀は、自身に読めない文字とともに画面に収まる、その後ろ姿に凝縮して描かれている。最後に彼が口ずさむ詩句は、「香 xiang」「様 yang」「疆 jiang」の文字が、ゆるやかに韻をふんでいる。伝統的な詩文の世界で、常に詠まれる対象物であった農民自身が、おのれの言葉とリズムにより、新中国の農民のあるべき姿を謳いあげている。その場面こそが感動すべき重点なのであろうが、なぜか哀愁の背中のほうが心に残るのであった。

ところで、これらの連環画で、文字を覚えた労働者が読まされている「愚公山を移す」と『劉介梅忘本回頭』は、いずれも毛沢東が言及したことによって「経典」となった物語である。『劉介梅忘本回頭』は、『連環画報』1957年12月と1958年3月に、それぞれ「讓実物来弁論（実物に弁論させる）」、「劉介梅忘本回頭」と題する連環画が掲載されている。それらによれば、劉介梅は、その思想的錯誤を正すために、見せしめとして「劉介梅今昔生活対比展覽会」という催しまで行われている。〔下-40-15齣〕



「想想過去、比比現在（過去を思い、現在と比べよう）」という図中のスローガンが示す通り、展覧会には劉介梅の解放前と解放後の持ち物が並べられ、彼は悔い改めたという。毛沢東のお墨付きを得て、この展覧会は北京でも開催され、劉介梅の物語は小説や演劇、連環画、映画となって、「大躍進」時期に人口に膾炙したのであった。

1960年の「掃盲識字運動」連環画が糞便を描くわけは、つまるところ夜学など座学で文字を覚えることより、額に汗して労働しながら文字を身につけることを奨励しているのであろう。

人は、糞便にまみれながら学ぶことができる。1958年の『廁所管理員王汝恒』では、糞便はその秘めたる力によって、青年労働者にメタンガスの存在を発見させた。だが、「掃盲識字運動」連環画では、糞便は労働者が文字を覚えるための小道具に墮してしまっている。結局のところ、程寛牛が糞便を運ぶことで吸収したのは、試験田の増収といった、「大躍進」時期にのみもてはやされた短命な知識にすぎない。1960年の連環画世界では、糞便はその真の価値を忘れ去られた存在として描かれているのであり、この糞便の扱われ方は、知性というものの置かれた位置をあらわしているようにも見える。

1958年、上海の公衆トイレでは「ある革命」が起き、糞便は一人の少年の「知」への扉を開いた。糞便は、人びとに科学の力を知らしめ、ときに愛とともに運ばれ、文字を知る喜びとともにあった。「大躍進」初期の糞便とは、そのような崇高な可能性に満ちた存在であったはずである。

だが、「大躍進」の夢が終わり、文化大革命を経た中国の公衆トイレは、かつてあった輝きを失ってしまったようだ。

46年後の2004年、北京では『廁所（トイレ）』と題された現代劇が上演された。主人公は、公衆トイレの管理人を務める史^{ジュニア}爺。「史 shi」とは、中国語で糞便を意味する「屎 shi」と同音の姓である。親子二代にわたるトイレの管理人である彼は、文化大革命期に東北の荒れ地北大荒^{ほくだいこう}へ「下放」した体験を持つ。「糞便の申し子」と名づけられた史爺は、『廁所管理員王汝恒』の王汝恒より、二十年近く遅れて生まれてきた世代を描いていると考えられる。

文化大革命の収束も間近、ニクソン訪中（1972年）直前の頃、トイレの管理人となるのと引きかえに、やっと北京に戻ることできた史爺には、かつて王汝恒が持っていたような糞便への愛着や好奇心はない。史爺は、90年代に高級ホテルのトイレの管理人となるが、結婚の夢破れた「中年童貞」として描かれる。最後に、高級ホテルの便器にオシッコをひっかけようとした史爺が、「……出ない！」と叫んで終わる幕切れは、執拗に「不能男性」のイメージを物語るものともいえる。いわば、「大躍進」時期の連環画世界が謳いあげた、糞便をめぐる労働・科学・愛・知といった要素がすべて

裏返しとなっているのが、『厕所』に登場する70年代から90年代にかけての公衆トイレと、それによって象徴される中国社会なのである。

糞便と向き合い、成長する少年のビルドゥングスロマンは、およそ半世紀を経て、繁栄する現代中国における「排泄できない」男性像に姿を変えた。そこには、糞便を集めることが奨励されながら、実際には排泄に不可欠な食物の得られなかった、「大躍進」の夢のあとが刻印されているのだろう。王汝恒から史爺への変遷をたどるためには、1958年に始まる「トイレの革命」のその後を、60年代、70年代の連環画世界から丹念に読み解いていかねばなるまい。汲めども尽きぬ糞便連環画の流れを追う旅は、つづく。

【参考文献】

- 1 中央工芸美術学院集体創作「十五年内超過英国」、『連環画報』1958年第13期（総第171期）、1958年7月
- 2 方成・王樂天・米谷・江帆・沈同衡・肖里・李濱声・蘇光・周令釗・吳耘・苗地・英韜・章啓美・游允常・陳今言・陳永鎮・陳奇峰・顧璞集体創作『1956年到1967年全国農業發展綱要（草案）』図解、『連環画報』1956年第5期（総第115期）、1956年3月
- 3 武田雅哉『猪八戒の大冒険』、三省堂、1995年
- 4 張連川著文、周光中画『厕所管理員王汝恒』、上海人民美術出版社、1958年12月
- 5 武田雅哉「〈小人書林迷走録〉第5回 〈上吐下瀉〉——あるいは痰壺と馬桶のある風景——衛生知識宣伝連環画に迷いたい!」、『連環画研究』第3号、2014年3月
- 6 李家正文『厠考』、六文館、1932年
- 7 李家正文『厠史話』、六興出版社、1949年
- 8 李家正文『厠風土記』、東和社、1953年
- 9 北野尚宏「中国——一九八〇年代初頭の都市尿尿の農村還元」、『アジア厠考』、勁草書房、1994年
- 10 木崎翠「中国——都市部の手洗い問題」、『アジア厠考』、勁草書房、1994年
- 11 武田雅哉『中国乙類図像漫遊記』、大修館書店、2009年
- 12 游允常画「糞便賽黄金」、『連環画報』1958年第3期（総第161期）、1958年2月
- 13 高原改編、蔣文彬画（陳志林作「真正熱愛工作的人」にもとづき改編）「熱愛工作的人」、『連環画報』1958年第19期（総第177期）、1958年10月
- 14 呉芝茂「甲烷の用途——蘇聯利用廢物製取沼氣的成就」、『化学世界』1952年第9期、1952年7月
- 15 鄧明「利用“啓普發生器”做糞便発酵池製沼氣」、『化学通報』1958年第9期、1958年9月
- 16 鮎「利用糞便発酵製取沼氣（甲烷）的実験」、『化学通報』1958年第8期、1958年8月
- 17 張英利「簡易的沼氣發生缸」、『化学通報』1958年第9期、1958年9月
- 18 「全国沼氣現場會議交流經驗」、『電業技術通訊』1958年12期、1958年12月
- 19 梅玉祥「哈密県製造沼氣的初步經驗」、『新疆農業化学通報』1958年第4期、1958年3月
- 20 「遼吉電管局瀋陽中心試驗所的沼氣小電站」、『物理通報』1959年第4期、1959年5月
- 21 郭振華・張世簡・婁世棠・侃侃ほか画「中国共产党第八次全国代表大会關於第二個五年計劃（1958-1962）的建議図解」、『連環画報』1956年第21期（総第131期）、1956年11月

- 22 遼寧省農業展覽會編『火温糞糞經驗介紹』、遼寧画報社、1959年3月
- 23 張修雷編、苗地画「夢」、『連環画報』1956年第23期（総第133期）、1956年12月
- 24 王卓君改編、段偉君画（掲林の原作にもとづき改編）「小突撃隊員」、『連環画報』1957年第3期（総第137期）、1957年2月
- 25 李家正文『新装版 泰西中国トイレット文化考』、雪華社、1981年（1973年初版）
- 26 河南商邱八一人民公社前進生産区秦宝善編画「翻不完土地不回家」、『連環画報』1958年第23期（総第181期）、1958年12月
- 27 彭大剛編輯、幻灯製片廠美術組画「慶豊年 頌公社」、『連環画報』1960年第2期（総第208期）1960年1月
- 28 浩然原作、米立改編、金宝臨絵『拉糞』、人民美術出版社、1958年10月（『連環画報』1958年第17期（総第175期）、1958年9月に転載）
- 29 丁芒作、勇雄画「挑糞」、『連環画報』1958年第5期（総第163期）、1958年3月
- 30 撫順中学学生周玉満編画「人人称讚王大伯」、『連環画報』1958年第22期（総第180期）、1958年11月
- 31 湖北省人民銀行呉伊凡編画「毛主席関心我們」、『連環画報』1959年第5期（総第187期）、1959年3月
- 32 游允常編画「猪媽媽積肥」、『連環画報』1959年第23期（総第205期）、1959年12月
- 33 阿英編『紅樓夢版画集』、上海出版公司、1955年
- 34 王樹村『中国民間美術史』、岭南美術出版社、2004年
- 35 中野美代子『奇景の図像学』、角川春樹事務所、1996年
- 36 武田雅哉『蒼頡たちの宴 漢字の神話とユートピア』、筑摩書房、1994年
- 37 大島正二『中国語の歴史——ことばの変遷・探究の歩み』、大修館書店、2011年
- 38 林鍔画「人人説的普通話 处处聽到讀書声」、『連環画報』1960年第7期（総第213期）、1960年4月
- 39 李焯編、閻照平・王泗画「悶塊」開竅」、『連環画報』1960年第7期（総第213期）、1960年4月
- 40 三思改編、游允常画「讓実物来弁論」、『連環画報』1957年第23期（総第157期）、1957年12月
- 41 「劉介梅忘本回頭」（「劉介梅今昔生活対比展覽会」画稿による）、『連環画報』1958年第6期（総第164期）、1958年3月
- 42 過士行「厕所」、『劇本』2004年第4期（総第467期）、2004年4月
（邦訳に菱沼彬晃訳「ニイハオ・トイレ」、『中国現代戯曲集 第六集——過士行作品集』、晚成書房、2007年がある。DVDに林兆華工作室『厕所』、中国人民大学出版社〔林兆華演出、過士行脚本、趙亮・陶虹・劉金山ほか出演、中国国家話劇院2004年7月上演〕がある）

【図版（ポスター）】

- 43 程国英作「為革命養猪」、1976年5月
- 44 祖庵公社北寺大隊社員馬建亜画「養猪現場会」（幼稚園教育図片）、1974年5月

*本研究は、科研費26370405の助成を受けたものです。

*本稿執筆にあたり、武田雅哉氏に一部の資料をご提供いただきました。お礼申し上げます。